

る支配期間を「羈縻支配時代」（六三〇～六八二年）と呼んでいる。

視点を唐に移すと、第一可汗国滅亡に伴う膨大な突厥遺民の処遇は唐の悩みのたねとなった。そこで数年間にわたる議論を行い、唐の行政区画になぞらえた羈縻州や羈縻都督府にそれぞれの部族を割り当てた上で、従来通りの遊牧生活を漠南の草原地域で営ませることとなった。唐の大規模な領域拡大に、唐支配下の突厥騎馬軍団が重要な役割を果たしていたと指摘されていること〔石見二〇〇八A、六八―六九頁／石見二〇一〇、一三一―一四頁〕からもわかるように、羈縻支配時代の研究は、中央ユーラシア遊牧民族史のみならず、唐代史の中でも重要な研究テーマとなっている。それゆえ、唐による突厥羈縻支配については、これまで多くの研究が蓄積されてきた。その研究視角は大きく分けて次の二点に集約されるだろう。一点目は蕃将研究の一環として突厥人の将兵を研究する視点である。唐に帰順した「異民族」の中で、軍事力に優れた遊牧民は唐の軍隊中で重要な地位を果たすこととなり、とりわけ将校クラス的首領層は「蕃将」として活躍した。彼ら蕃将の重要性が、これまで注目されてきたのである。この分野では、章群氏〔一九八六〕や馬馳氏〔二〇一一〕が、唐一代を通じた突厥を含むあらゆる蕃将の関連制度を概観している。さらには、蕃将と麾下の遊牧民について、唐前半期の状況を谷口氏〔一九七八〕が、唐後半期のトルコ系遊牧民について山下氏〔二〇一一〕が検

討を加えている。両氏の検討によれば、基本的に遊牧民出身の蕃将は、前半期でも後半期でも麾下の部族単位で従軍していたという。

次に二点目として、突厥羈縻州府の沿革が大きな論題となっている。というのも、突厥に対して置かれた羈縻州府の沿革は、諸史料ごとに矛盾が多いため、それらの矛盾をどう整合的に解釈するかが問題になっているからである。この問題については、岩佐氏〔一九三六〕の研究と、岩佐氏の研究を修正して発展させた石見氏〔一九九八、第一部第四章〕の研究が、諸史料の矛盾を最も整合的に解釈しており、最高峰と言つてよい。それゆえ、羈縻州府の沿革研究においては、両氏の研究を踏まえることが最低条件となる¹⁾。

このように、突厥の羈縻支配に対しては多くの研究の積み重ねがあるが、いまだ問題点も残されている。従来の研究は唐王朝による遊牧民支配という、唐側からの視点で羈縻支配を描きがちであった。しかし、唐側ばかりに着目していたのでは、現地で開催していた遊牧民の歴史に理解が及ばないであろう。この羈縻支配時代もまた、突厥の歴史のひとつである以上、突厥側からの視点が欠かせない。羈縻支配下の突厥は、旧来通り部族ごとの遊牧生活を継続していたと考えられている〔章群一九八六、九六頁〕。しかし、支配者が唐へと移ったことによって社会情勢は大きく変わったはずであり、それに伴う変化がどこかしらに生じたと考え

るべきであろう。その変化を追うことが、突厥史の一環として鞏
摩支配時代を捉えることにつながるはずだ。

さらに、近年の開発により中国で多くの突厥人墓誌が発見され
ており、年を追うごとに史料状況は改善している。それゆえ、岩
佐氏の時点では考えも及ばなかったであろうが、墓誌の記述から
詳細に有力者個々人の事跡を追跡することで、さらに研究を深化
することが可能になってきている。

以上のような観点から、本稿では、突厥第一可汗国滅亡前後の
突厥有力者の事跡を、主に石刻史料を用いて検討し、初期の突
厥鞏摩州府の長となった人々にどのような共通点があるのかを考
察する。この作業を通じて、鞏摩支配を受けた突厥集団にいか
なる変化が生じたのか、そして、その変化が起きたのはいかなる理
由であったのかを、主に唐の第二代皇帝、太宗李世民的時代に焦
点を合わせて論じたい。

第一章 唐の建国と突厥

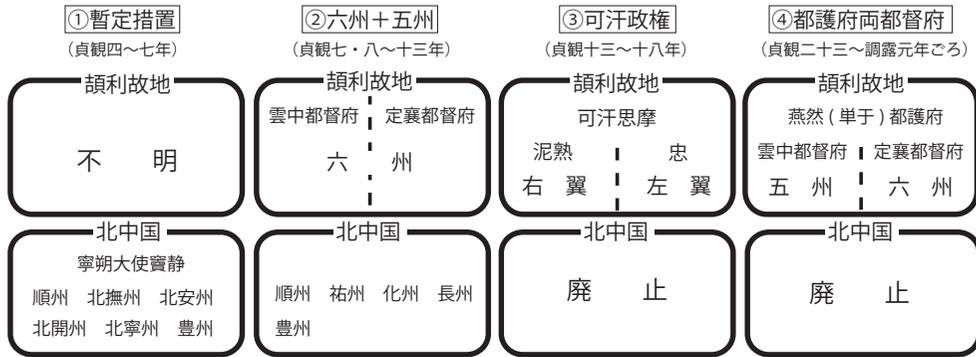
初期の突厥鞏摩州府について考察するためには、突厥第一可
汗国と唐の関係から考える必要があるだろう。唐建国以前の隋の
時代には、第二代煬帝の失政により、大規模な反乱が全国で発生
した。突厥は、隋に対して臣属の姿勢を取ってきたが、隋が乱れ
ると争乱に積極的に介入して群雄たちを臣属させるに至り、十余
りの群雄が突厥に服属し、その中には唐を建国する李淵も含まれ

ていた〔呉王貴一九九八、一五一―一五三頁〕。李淵は、本拠地
である太原で起兵し長安へ進軍する際、突厥に使者を送り騎馬の支
援を受けている〔『大唐創業起居注』卷二（三〇頁）〕。

六一八（義寧二／武徳元）年に煬帝が殺害されて隋が滅亡する
と、突厥は唯一生き残った煬帝の孫、楊正道を擁し北中国に直接
介入したため、唐と突厥の関係は悪化した〔石見一九九八、第
部第三章〕。そこで、突厥の脅威に対処するため、李世民は「玄武
門の変」のクーデタを起こして太宗に即位し〔石見一九九八、第
I部第二章〕、政策転換を支持しない突厥有力者に離反をうながし
て、突厥を分裂状態に陥らせた〔石見一九九八、九八一―一〇三頁〕。

さらに、漠北で突厥支配下のトルコ系遊牧諸部族（鉄勒^②）が、
薛延陀を中心に反旗を翻し、六二八（貞観二）年には薛延陀可汗
国（六二八―六四七年）が成立し、翌年に唐から冊立を受けるに
至った。突厥の頡利可汗は完全に孤立し、ついに唐の将軍、李靖
によって本拠地である陰山山脈南麓の定襄^③を攻撃されて敗走し、
途上で捕らえられたのである〔『通典』卷一九七「突厥上」（五四
一―五四二頁）〕。

頡利可汗が捕縛された後、唐が突厥遺民の処理に頭を抱えるこ
とになったのは既に述べた通りである。唐は六三〇年の時点で、
匈奴の費也頭氏出身である寧朔大使竇靜の指揮の下、暫定的に北
開・北寧・北撫・北安・順の五州（後述するように、実は豊州を
加えて六州）を北中国に置き、遺民の措置を行った〔岩佐一九三



【図2】

六、八〇―八一頁／石見一九九八、一一九―一二一頁〔第一段階。以下の沿革は図二参照〕。その間に唐朝廷内での議論が終結して長城以南に突厥人を住まわせることとなり、六三三（貞觀七）・六三四（貞觀八）年ごろに額利可汗の故地定襄周辺に定襄都督府・雲中都督府を設置してその治下に六州を置き、北中国では五州を改変して順・祐・化・長の四州（やはり、豊州を加えて実は五州）を置いた〔石見一九九八、一一五―一九九頁〕（第二段階）。ところが、唐の侍衛に入っていた突厥人の中で、第十二代始畢可汗の子である阿史那

結社率が甥の賀邏鶻を担いで六三九（貞觀十三）年に太宗の暗殺未遂事件（九成宮事件）を起こしたため、唐は急遽突厥遺民を陰山の故地に帰すことに決定し、阿史那思摩を可汗に冊立して自治を任せ、それ以前に設置した羈糜州府のうち、北中国のものは廃止するにいたった〔岩佐一九三六、八四―八六頁／石見一九九八、一一一―一二二頁〕（第三段階）。しかし、突厥の可汗による自治復活を快く思わない薛延陀の攻撃を受け、さらには突厥内部の牧地争いを思摩には抑えることができなかったため、六四四（貞觀十八）年に思摩は可汗を退位することとなった。唐は六四九（貞觀二十三）年に、改めて突厥故地に定襄・雲中兩都督府と十一州を置いて遊牧民伝統の左右翼体制とし、阿史德氏と舍利氏を兩都督として統治を任せ、構成部族ごとに一州を置いたのである〔石見一九九八、一二三―一三五頁〕（第四段階）。

このような兩都督に阿史德氏と舍利氏を起用し、王族である阿史那氏を用いない第四段階の方策は、反乱の旗頭になりかねない阿史那氏を権力から遠ざけるため、唐が意図的に行ったとされる〔岩佐一九三六、八八―八九頁／護一九六七、二三一―二三三頁〕。唐からしてみれば、阿史那氏は突厥を今一度結束させる危険な存在だった。実際に、突厥第二可汗国建国前の二度の反乱においては、阿史那氏が担ぎ出されて反乱の旗頭になっているし、唐側も突厥第二可汗国に対して、額利可汗の曾孫の阿史那感徳を傀儡可汗に擁立して対抗しているのである〔齊藤二〇一一、二五―三一

【表一】『資治通鑑』に見える貞観四（六三〇）年設置の突厥羈縻州

史料	後継	長	地名	日付
五月、辛未、以突利為順州都督、使帥部落之官。	——	突利可汗 阿史那什鉢苾	順州	五月七日
壬申、以阿史那蘇尼失為懷德郡王、阿史那思摩為懷化郡王。頡利之亡也、諸部落酋長皆乘頡利來降、獨思摩隨之、竟與頡利俱擒、上嘉其忠、拜右武侯大將軍、尋以為北開州都督、使統頡利舊衆。	化州	阿史那思摩	北開州	五月八日
丁丑、以右武衛大將軍史大奈為豐州都督。	——	史大奈	豐州	五月十三日
六月、丁酉、以阿史那蘇尼失為北寧州都督、以中郎將史善應為北撫州都督。	長州	阿史那蘇尼失 史善應	北寧州 北撫州	六月四日
壬寅、以右武衛將軍康蘇密為北安州都督。	——	康蘇密	北安州	六月十二日

頁」。

ところが、唐が最初期に置いた第二段階の六州においては、実は阿史那氏が多く長である都督に任命されている「表一参照」。では、なぜ当初の段階では阿史那氏が都督に就くことができたのだろうか。岩佐精一郎氏は、これらは「可汗近親の別部の大帥」か、「可汗帳幕下の寵臣」であり、彼らの任命は「東降の大酋に対する顕賞に外ならぬ」と述べている「岩佐一九三六、八〇頁」。しかしそれだけでは、数多くいた突厥来降者の中で、彼らを選ばれた必然性を説明したとは言えない。唐の羈縻支配においては、突厥に對する羈縻州府とは部族単位の集団であり、その長の称号は部族を統率する部族長に与えられていた「章群一九八六、九六頁」。とすれば、これら六州の長は、唐から部族支配の権限を与えられた

人びとということになる。彼らは、どうやって唐から突厥集団内における統治の権利を獲得したのだろうか。次章では、彼らの事跡を考察したい。

第二章 唐の建国と突厥有力者

本章では、最初期に置かれた羈縻州府の長について概観する。先行研究では、豊州都督府が含まれていないが、こゝも長が突厥人であることが判明しているため、そちらも見てみたい。

① 順州都督・突利可汗・阿史那什鉢苾

この人物は始畢可汗の長男であり、始畢の時代に泥歩設ニホドに、次の処羅可汗の時代に突利可汗になり、幽州の北に所領を持つてい

た「護一九六七、三一八一―三二五頁」。彼と唐との関わりは、高祖の時代に始まっている。

『通典』卷一九七「边防十三 突厥上」(五四―二頁)

突利は初め武徳の時より、深く自ら結託し、太宗も亦た恩義を以て之を撫せば、結びて兄弟と爲り、與に盟ちがいて去る。後に頡利政亂るるに、驟とつかに突利に徵兵せんとするも、突利は之を拒みて與えず。尋いで頡利の攻める所と爲り、使を遣わして來りて師を乞えば、太宗は困りて將軍の周範をして太原に屯し以て進取を圖らしむ。⁴

このように、突利は高祖の武徳年間から唐と接触を持っていたが、その際には後の太宗、李世民と盟約を結び、義兄弟となった。さらに、頡利に離反して唐に援軍を求めると、唐と緊密な関係にあった。これは、李世民との盟約関係に基づくものだったと考えられる。彼は結局、六二九(貞觀三)年に唐に帰順し「資治通鑑」卷一九三「貞觀三年十二月戊辰条」(六〇六七頁)、突厥が滅亡した六三〇年に、代州辺外に置かれた順州「岩佐一九三六、八二―八三頁」の都督となって部衆を統率することとなった「表一 参照」。

ところが、翌六三一(貞觀五)年に什鉢苾が急死したため、順州都督の地位は息子の賀邏鶻に継承された。しかし、彼は結社率とともに六三九(貞觀十三)年の九成宮事件に荷担したため、流刑となっている「『通典』卷一九七「边防十三 突厥上」(五四―二

―五四―三頁)」。彼が反乱に荷担した理由として、『旧唐書』卷三九「地理志二 河東道代州中都督府条」(一四八三頁)には、事件の前年である六三八(貞觀十二)年に順州が廢されたことが記されており、その順州廢止が九成宮事件につながった可能性が指摘できよう。この点は次章で詳述する。

② 北開州都督・阿史那思摩

この人物は、第四代他鉢可汗の孫であり、一九九二年に陝西省咸陽市礼泉県で発見された墓誌「李思摩墓誌」(氣賀澤編二〇〇九、二九二)⁵と、その墓誌を用いた鈴木宏節氏の研究「鈴木二〇〇五」により、それまで不明であった血統や歴史的役割が明らかとなった。その研究によれば、彼は七世紀初頭には俱陸可汗になって漠北の混乱取捨に当たったが、間もなく退位したという「鈴木二〇〇五、四六―四八、五二頁」。その後、始畢から頡利可汗の時代には不遇であったが、これは第二代乙息記可汗の子孫である始畢以下の可汗たちが、遠縁の他鉢可汗の子孫である思摩に対して、対抗意識を持っていたためではないかと推測されている「鈴木二〇〇五、五二頁」。それゆえ、思摩はソグド人に顔つきが似ていて混血が疑われると中傷された。そのせいで、彼は、可汗に次ぐ高位である設シャトとなつて、自らの領民を有して軍事力を行使する権利を持つことができず「護一九六七、三五八頁」、単に「王子」を意味する称号である特勤テギンの位「護一九六七、二六五、

四〇七頁／cf. Clauson 1972, p. 483]しか与えられなかったとい
う『通典』巻一九七「辺防十三 突厥上」(五四一五頁)。

その思摩は、武徳年間に遣使によって入朝して和順郡王の位を
賜与され、突厥滅亡とともに帰順している『通典』巻一九七「辺
防十三 突厥上」(五四一五―五四一六頁)。つまり、思摩も①の
什鉢苾と同様、突厥滅亡以前から唐と関係を保ち、唐から
爵位を受けていたのである。その際には、思摩は即位前の李世
民と会見したようである。

『資治通鑑』巻一九一「唐紀七 武徳七年八月条」(五九九二―
五九九三頁)

世民は又た突利に説かしむるに利害を以てすれば、突利は悦
びて命に聴したがう。頡利は戦わんと欲するも、突利は可きかざれば、
乃ち突利と其の夾テ畢特勒テギンの阿史那思摩とを遣わして來りて世
民に見まえしめ、和親を請もえば、世民は之を許す。

上述した突利可汗阿史那什鉢苾とともに李世民と会見しているこ
とから、什鉢苾と同様に思摩も李世民と盟約を結んだ可能性があ
るだろう。やはり、思摩も武徳年間から唐、それも李世民と個人
的な関係を持っていたと考えられる。

とはいえ、思摩の帰順は上述したように突厥滅亡時であり、彼
は六三〇年に北開州都督に任命されている「凶三參照」。さらに、
六三四(貞觀八)年に羈糜州府編成の第二段階で北開州は化州に
改称されており、思摩は引き続きその長に任命された「岩佐一九

三六、八二頁」。そして、六三九(貞觀十三)年の「九成宮事件」
が起こると、化州が廃止されて思摩は可汗に任命され、故地であ
る陰山周辺に帰されて突厥部衆を統率することとなった『通典』

巻一九七「辺防十三 突厥上」(五四一六頁)。その際には、「又た
左屯衛將軍の阿史那忠を以て左賢王と爲し、左武衛將軍の阿史那
泥熟もて右賢王と爲し、以て之に貳そごう」『通典』巻一九七「辺防
十三 突厥上」(五四一六頁)」とあって、阿史那忠と阿史那泥熟の
二人を遊牧民伝統の兩翼体制にのっとり、思摩を補助する地位に
就けた。この兩翼の二人のうち、泥熟は他に情報がなく何者か不
明であるが、忠は後述するように③―蘇尼失の息子である。

こうして思摩は部衆を連れて故地に帰ったのであるが、漠北の
薛延陀による度重なる攻撃に加え、思摩自身にも部衆を統率する
能力が不足していたために、突厥国内には混乱が生じ、貞觀十八
年⁸に思摩は退位した「岩佐一九三六、八五―八六頁／石見一九九
八、一一一―一二二頁」。そして、彼は太宗の高句麗遠征に従軍し
た後、羈糜州府の長に戻ることなく六四七(貞觀二十一)年に死
去したのである「李思摩墓誌」一七―一八、二〇―二二行目」。

③―北寧州都督・沙鉢羅設・阿史那蘇尼失

この人物は血統の記述に混乱があるものの、護雅夫氏によって
啓民可汗の弟に比定されており「護一九六七、三一―三二―三八
頁」、「靈州の西北」、おそらくエチナ方面に所領をもっていたもの

と思われる「岩佐一九三六、七九、一三七頁、注七」。彼の事跡は息子の忠ともども短いながら正史に列伝されている。「旧唐書」巻一〇九（三二九〇頁）／『新唐書』巻一一〇（四一一六頁）。さらに、忠に関しては一九七二年に陝西省咸陽市礼泉県から発掘された墓誌「陝西省文物管理委員会／礼泉県昭陵文管所一九七七、一三二頁」と、墓前にあった神道碑が知られているため、その事跡のおおよその部分がわかる。「cf陳志謙二〇〇二」。その忠の墓誌には、蘇尼失と唐との関係について次のように記されている。

「阿史那忠墓誌」八〜九行目「氣賀澤編二〇〇九、一三九六」
 武徳の日、元王（＝蘇尼失）は款を太宗と結び、公（＝忠）は時に則ち綺襦（御曹司）たれば、早く謁見を蒙る。貞觀云に始まり、塞北乖離するに及び、公は誘いて頡利可汗を執え以て國に歸せば、寵命を加うるを蒙り、左屯衛將軍を授かる。

このように「阿史那忠墓誌」によれば、阿史那蘇尼失は、武徳年間即位前の太宗李世民と友好関係を結んでおり、①の什鉢苾の場合と同様である。さらに、息子の忠も即位前の李世民との謁見を行っており、六三〇年に最終的に頡利可汗を捕らえたのが忠であった。彼ら親子も什鉢苾と同様、唐建国直後から李世民を通じて唐と緊密な関係を保っていたものと思われる。そして、頡利捕縛後、親子ともども唐に帰順し、同年六月に蘇尼失が北寧州都督に任命されている「表一参照」。その後、北寧州都督府は羈縻州府整理の第二段階にいたった六三三（貞觀七）年に長州に改組され、

同じく蘇尼失が長となったと考えられるが、蘇尼失は翌年の六三四（貞觀八）年に死去している。

③―長州都督・阿史那忠

上述の通り、阿史那蘇尼失の子である。突厥滅亡時点では羈縻州府の長ではなく、上で引いたように左屯衛將軍を授与されているが、「阿史那忠墓誌」（十一行目）によれば、「（貞觀）十一年内に、長州都督を檢校す（十一年内、檢校長州都督）」とあって、六三四年の蘇尼失の死後、六三七（貞觀十一）年に忠が長州都督を檢校（＝代理）の形で引き継いだと見られる。「朱振宏二〇一三、一九八頁」。

ところが、六三九（貞觀十三）年に長州は廢止される。「旧唐書」卷三八「地理志一 関内道夏州都督府」（一四一四頁）。九成宮事件後の阿史那思摩による可汗政權発足に伴うものである。「岩佐一九三六、八四頁」。思摩が可汗になった際、忠は「左賢王」に就任しており、「通典」卷一九七「边防十三 突厥上」（五四一六頁）、遊牧国家伝統の左右翼体制のうち、東方左翼を治めることになったのである。その後、思摩政權が六四四（貞觀十八）年に崩壊すると羈縻州府の長には戻らず、同年にはタリム盆地の焉耆国征服に従軍して西域の慰撫を行い、六四五（貞觀十九）年には夏州に侵入した薛延陀を撃破しており、薛延陀が滅亡した六四六（貞觀二十）年には右武衛大將軍に就任している。「陳志謙二〇〇

二、七二―七三頁」。その後も高宗の時代まで対外戦争で活躍し、六六〇（顕慶）年の契丹討伐、六六八（総章元）年の吐蕃討伐などに従軍し、六七五（上元二）年に六五才で死去した「陳志謙二〇〇二、七〇、七三―七四頁」。そして、墓誌の記述（三二六行目）によれば、同年中に墓誌が作られ、葬られている。

④ 北撫州都督・史善應

この人物は近年墓誌拓本が公表されたことでにわかに注目が高まった。墓誌自体は西安市長安区から出土したが、現在、洛陽の個人が所蔵しているという「朱振宏二〇一三、一七九頁」。これまでに三本の研究が発表されており「湯燕二〇一三／朱振宏二〇一三／王慶衛二〇一四」、それぞれに録文が掲載されているほか、朱二〇一三以外は鮮明な拓本写真も掲載している。この人物は、典籍中では北撫州都督就任の記事「表一参照」以外に全く現れない。シルクロード商人としてよく知られた、ペルシア系のソグド人に多い史姓であることから、突厥人ではなくソグド人であろうと漠然と考えられてきた「cf. 岩佐一九三六、一三七頁、注十一／森部二〇一〇、九八頁」。ところが、墓誌の記述によればこの人物は歴とした阿史那氏で、祖父は第六代の沙鉢略可汗であり、父は隋に使者として派遣された褥但特勤（墓誌では褥檀特勤）だったのである。彼が史姓を名乗っていることに関しては、上に挙げた③―二の阿史那忠が史姓を与えられており「『旧唐書』卷一〇九「阿史

那忠伝」(三二九〇頁)」、同様に史善應も史姓を与えられたものと考えられる。褥但特勤は五九一（開皇十一）年に使者として隋に派遣されており、そのまま留まって隋に仕えたという。善應は六〇一（仁寿元）年ごろに宿衛に入り、煬帝の高句麗遠征にしたがった後、江都で宇文化及が煬帝を弑逆すると宇文化及に従って山東にいたるがそこから離脱し、六一八（武徳元）年に唐に帰順した「湯燕二〇一三、五七七頁」。唐との関わりが始まるのはその後なので、以下は墓誌の記述を挙げつつ考察したい。

「史善應墓誌」一〇―一二、一四―一五行目

（武徳）三（六一二〇）年、左翊衛驃騎將軍に除せらる。後に皇上の東夏を討平するに従い、恒に軍鋒に冠たり、榮勳は第一なれば、上柱國を加え、弓高侯に封ぜらる。……（中略）……貞觀四（六三〇）年、都督北撫州諸軍事・北撫州刺史に除せらる。十二（六三八）年、追せられて左衛將軍と為る。

まず、注目されるのが、唐建国まもない六二〇年に、「皇上」の指揮下で「東夏」討伐に従軍していることである。この墓誌は太宗治世下の六四三（貞觀十七）年に作成されているため、「皇上」とは、太宗即位前ではあるものの李世民を指している。また、「東夏」とは一般的には中国東部を漠然と指す語であるが、この場合は河北の涪州を拠点とした群雄、竇建徳の集団を指すものと思われる。というのも、次の史料にあるように、竇建徳の名乗った国号が「夏」だからである。

『旧唐書』卷五四「竇建德伝」(二二三七―二二三八頁)

宗城の人の玄珪一枚を獻ずる有り。景城丞の孔德紹曰わく、「昔夏禹の籙を膺けるに、天は玄珪を錫う。今の瑞は禹と同じければ、宜しく夏國と稱すべし」と。建德之に従う。¹⁵⁾

さらに、歴史的な経緯をみても、六二二(武徳四)年五月に李世民率いる唐軍が竇建徳を撃破、捕縛しており「蕭錦華一九九八、九二頁」、太宗の行軍に従ったと記す「史善應墓誌」の記述に対応する。そのため、「東夏」は竇建徳の集団であると判断したい。史善應は李世民的麾下で河北平定に尽力したのである。

その後、墓誌では史善應は突厥滅亡後の六三〇(貞観四)年に北撫州の都督に任命されており、編纂史料の記述と合致する「表一参照」。さらに、六三八(貞観十二)年には左衛將軍に就任している。この際、北撫州がどうなったか墓誌からは明らかではないが、「呼び出す」という意味の「追」が使われているので、実際に長安で入侍したと考えられる。しかも、上述した①の順州もまた同年に廃止されていることから考えれば、廃止されたと考ええるべきであろう。¹⁶⁾その後、史善應は六四二(貞観十六)年に死去しており、史善應の子、史崇禮の墓誌も発見されているが、彼が鞏縻州府の長に就任した形跡はない。

⑤ 北安州都督・康蘇(密)

この人物については情報が極めて少ない。表一で挙げた北安州

就任の記事を除けば、第一可汗国時代の事跡を伝える記事は次のみだけである。

『通典』卷一九七「辺防十三 突厥上」(五四―一頁)

(貞観)四(六三〇)年正月、李靖は進みて惡陽嶺に屯し、夜に定襄を襲えば、頡利は驚擾し、因りて牙を磧口に徙す。胡酋の康蘇密等は遂に隋の蕭后及び楊正道を以て來降す。¹⁷⁾

このように、突厥滅亡直前に頡利可汗から離反し、隋の蕭皇后と楊正道を連れて唐に降伏した。蕭皇后と楊正道は、突厥に隋から義城公主が降嫁されていたことから、煬帝が殺害された後に突厥に庇護を求め、突厥は楊正道を隋王に擁立して唐と対決した「石見一九九八、第一部第三章」。康蘇密はその蕭皇后と楊正道を唐に引き渡した人物で、唐代にはソグド人だけが名乗る姓の可能性が高い康姓である「福島二〇〇五、一五七頁」ため、ソグド人であると考えられる。この人物について、プーリイブランク氏は、突厥中でソグド人集落を統括していただろうと推測している [Pulleblank 1992, pp. 324-325]。突厥第一可汗国では最初期からソグド人集落が存在しており、突厥可汗の宮中にも多くのソグド人ブレインが存在していた「護一九六七、第一編第二章/cf. 齊藤二〇一四、二二六―二二七頁」。森部豊氏によれば、そうした突厥国内に居住するソグド人の一部は、突厥の遊牧文化を受け入れて遊牧民化した「ソグド系突厥」であった「森部二〇一〇、一〇八頁」。

このように、突厥第一可汗国においてソグド人の存在は非常に重要であり、康蘇密が北安州の長に任命されたのも、突厥遺民中のソグド人対策の一環であったことは想像に難くない。しかしながら、数あるソグド人有力者の中でなぜ康蘇密が選ばれたのかは、史料からは不明と言わざるを得ない。

⑥ 豊州都督・史大奈

豊州都督府の沿革は次のように記されている。

『元和郡県図志』卷四「関内道四 豊州」(二二二頁)

貞觀四(六三〇)年、突厥降附すれば、又た權りに此に豊州都督府を置くも、縣を領べず惟だ蕃戸を領ぶるのみ、史大奈を以て都督と爲す。十一年、大奈死すれば復た府を廢し、地を以て靈州に屬せしむ。¹⁸⁾

このように、豊州都督府は突厥滅亡の際に遊牧民を管轄するために設置された。そして、都督には史大奈という人物が任命されている。史大奈については、次の史料に詳しい記述がある。

『通典』卷一九九「辺防十五 突厥下」(五四五四頁)

特勤の大奈は、隋の大業中に曷薩那可汗とともに中國に歸す。煬帝の遼東を討つに從うに及び、功を以て金紫光祿大夫を授かる。後に其の部落を樓煩に分かつ。會たま高祖舉兵するに、大奈は其の衆を率いて以て從う。……(中略)……武徳の初め、太宗に從いて薛舉を討ち、又た王充・竇建徳・劉黑闥を

平らぐるに從い、並びに殊功有れば、宮女三人、雜綵萬餘段を賜わる。貞觀三(六二九)年、累ねて右武衛大將軍・檢校豊州都督に遷し、竇國公に封じ、實封は三百戸なり。¹⁹⁾

まず、史大奈は本史料では「特勤」という称号を伴って現れる。上で触れたように特勤(テギン)とは、「王子」を意味する称号であり、つまりは王族の阿史那氏が帯びる称号だった「護一九六七、三六五、四〇七頁/cf. Clauson 1972, p. 483」。そのため、大奈は阿史那氏出身であると判断することができる。彼も、③—阿史那忠や、④史全應と同じく、史姓を与えられたと考えられる。

さて、豊州都督府は従来、ここまで検討してきた羈縻州府に含んで検討されてこなかった。しかし、六三〇年の突厥滅亡とほぼ同時に設置されている点と、突厥の有力者に配下の遊牧民を統治させている点と同じであるため、本稿では暫定的に設置された五州に準じる羈縻州府として扱う。²⁰⁾

史大奈の帰順の経緯であるが、曷薩那可汗なる人物と共に帰順したと記されている。曷薩那可汗は、本名を達漫といい、第一可汗国第三代木汗可汗の曾孫に当たる人物である。「大澤一九九九、三五〇—三五二頁」。彼の一族は、祖父・阿波可汗の時にモンゴル高原の勢力争いに敗れて、東部天山地域に逃れ西突厥の支配者となった。父の泥利可汗は新疆ウイグル自治区昭蘇県小洪那海にある石人に刻まれたソグド語銘文に、ニリ可汗 *ny x'ya* として現れる人物である「大澤一九九九、三五〇頁」。そして、シムス・ウ

イリアムズ Sims-Williams 氏によるソグド語銘文の解説結果と、漢籍の記述とを比較検討した陳凌氏によれば、西突厥の動乱によって泥利可汗は六〇四（仁寿四）年（ソグド語銘文ではネズミ年）に死去したという「陳凌二〇一三、二八一―二九頁」²¹。その後、達漫も泥彌処羅可汗として即位するが鉄勒などの反乱に遭い、ついには六一一（大業七）年に隋に降って煬帝の高句麗遠征に従い、功績によって曷薩那可汗に冊立されたのである「大澤一九九、三五二―三五三頁」。

史大奈もその達漫とともに入朝し、同じく高句麗遠征に参加して功績をあげ、河東北部の樓煩郡（嵐州）で遊牧することを許された。²²その後、唐の起兵に参加し、李世民的指揮下で各地の軍閥を平定し、国内統一に功績があったという。その点は、④史善應と同様である。その功績によってか、六二九（貞觀三）年か六三〇（貞觀四）年のいずれかに豊州都督府の長に任命されたものと考えられる。しかし、六三七（貞觀十一）年の史大奈の死去とともに豊州都督府は廃止されてしまう。子孫がその地位を世襲するようなことはなく、息子の史仁表は太宗の娘を降嫁されて駙馬都尉となつてはいる「布目一九六八、三四六―三四七頁」が、豊州都督の地位に就いたことは確認できない。²³

第三章 太宗期の突厥羈縻支配の展開

第一節 貞觀四年時の羈縻州府長の選出基準

前章では、貞觀四年に突厥第一可汗国が滅亡した時点で据えられた長たちの経歴を羅列的に概観した。その結果、彼らには明らかな共通点が見られた。それは、ほとんど史料が無いため不明である⑤康蘇密を除き、全員が何らかの形で太宗即位前の李世民と関わりを持っているということである。それも、二通りの関わり方に分けることが可能であった。

- （一）突厥に属しながら、同時に李世民と個人的に会見し、場合によっては盟約などを結ぶ。①阿史那什鉢苾、②阿史那思摩、③一阿史那蘇尼失、③一阿史那忠
- （二）李世民的麾下で従軍し、群雄討伐に参加。④史善應、⑥史大奈

これらを見れば、貞觀四年に設置された第一段階の六州の長は、単に突厥の有力者の中から選ばれたのではなく、李世民と、それも即位以前の武徳年間に直接面会し、関係を結び結ぶことができただけが任命されていることが明白である。

この点、墓誌史料だけに頼れば、偉大な皇帝である李世民との関係をあえて強調して書いているのだろうという疑念が湧くだろう。山下将司氏が指摘するように、唐に降ったトルコ系遊牧民は太宗との紐帯を強調する傾向があり、中には先祖と太宗との虚偽

の紐帯を記した石刻史料も存在する〔山下二〇一一、六一七頁〕のは事実である。しかし、①②⑥の事例は漢籍史料の記述から李世民との関係が明らかであるし（反対に、②の事例は墓誌中に李世民との関係が明示されていない）、④の事例は、墓誌だけにある情報ではあるものの、従軍した事実だけが記されていて、李世民との関係をあえて強調しているわけではない。③の両事例のみ、墓誌に李世民との関係が強調されていて、その情報を利用するしかないため不安が残る。とはいえ、唐代の墓誌史料は、歴史書編纂のために史館に提出する行状を参考に撰文された例もあるように、事実に基づきながら文飾を施すのが一般的と考えられる〔石見二〇〇七、一三―二二頁／石見二〇〇八B、一一九―一二〇頁〕。それゆえ、本人や直近の近親者の具体的な挿話まですべて虚構であると断じることができず、③以外の事例も考慮すればこの情報は信じるに足るだろう。

このような第一段階の羈縻州府の長たちと李世民との関係は、唐が降ってきた膨大な突厥遺民たちを羈縻支配する必要に迫られた際、制度云々よりも、まずは皇帝との直接的な関係を重要視して人選を行っていたということを意味している。しかも、そこでは、早期に関係を取り結んでいる、ということが特に重要視された。この点が重要視されていることは、長に任命されなかった阿史那氏の事跡と比較することでよくわかる。これらの事例を示すことが、墓誌史料に対する疑念を払う一助にもなる。

まず、太宗期の有力蕃将として太宗の陵墓である昭陵に陪葬され、新旧『唐書』に列伝された阿史那社爾の事例〔『旧唐書』卷一〇九（三二八―三二九〇頁）／『新唐書』一一〇（四一一―四一四―一六頁）〕を見てみよう。

阿史那社爾は、第十三代処羅可汗の次男であり、六一七（義寧元）年か六一八（武徳元）年ごろ、十一才で漠北において拓設に任命された〔護一九六七、三二八頁〕。ところが、六二六（武徳九）年に漠北で薛延陀をはじめとする鉄勒の反乱が起きた〔小野川一九四〇、二三―二四頁〕ため、阿史那社爾は漠北を追われて東部天山方面へ逃れたが、第一可汗国が滅亡すると当地で都布可汗に即位して独立勢力を形成した。最終的に、社爾が唐に帰順したのは六三六（貞観十）年のことであった〔岑仲勉一九五八、二一四頁〕。そして、帰順後には左驍衛大將軍を授かり、数年後には衡陽長公主と婚姻して駙馬都尉になっている。さらに、六四〇（貞観十四）年にはタリム盆地の高昌国討伐、六四五（貞観十九）年には高句麗討伐に従軍して、ついには昭陵に陪葬されるにいたったのである。

このように、第一可汗国末期には独立勢力として活動したほどの勢力を有した阿史那社爾であるが、一方で羈縻支配下の突厥では羈縻州府の支配権限を最後まで与えられていない。上述したように、羈縻州府とは遊牧集団であるから、社爾は遊牧集団を率いる権限を、少なくとも表向きには与えられていなかったことにな

る。さらに、六三九（貞觀十三）年に成立した阿史那思摩の可汗政権にも、社爾は既に帰順していたにもかかわらず参加していない。帰順の遅かった社爾は、突厥集団の支配には参加できなかったのである。唐代史の文脈から見れば、彼の蕃将としての活躍は輝かしいものに見えるが、突厥側から見れば、彼は唐によって突厥集団内の支配者の立場から排除されていたと言っているだろうか。

次に、処羅可汗の長子で、六二九（貞觀三）年に帰順した郁射設・阿史那摸末の場合が似たようなケースである。摸末は武徳中にオルドスで群雄の梁師都と連携して勢力を振るったが、唐の離間策にに応じて六二九年に九俟斤イルキンとともに唐に降った〔護一九六七、三二六―三二七／石見一九九八、一〇〇―一〇一頁〕。

彼とその家系については、摸末本人と子の施、孫の哲の三世代にわたって墓誌が発見され研究が進められてきている〔石見一九九八、第二部第一章／葛承雍二〇〇六〕。その結果、摸末は帰順後に唐から可憐公主を降嫁されている〔石見一九九八、二〇一頁〕にもかかわらず、彼が得た官職は右屯衛將軍のみであり、王号を与えられたり羈縻州府の長に任命されたほかの有力者に比べて、不遇であったことが指摘されている〔葛承雍二〇〇六、一四五―一四六頁〕。そこで、彼と太宗の関係を見てみると、七二三（開元十一）年に作成された摸末の子、施の墓誌にある次の一文が示唆的である。

〔阿史那施墓誌〕（一〇―一三行目）〔氣賀澤編二〇〇九、二八

五八〕

太宗は勅書もて慰問して曰わく、「突厥の郁射設・可憐公主は是れ朕の親舊にして、情は一家と同じ。随日の初婚の時、朕の家に在りて禮を成し、朕も亦た親しく見る。此の事を追憶し、時暫も忘るる無し」と。²³

この文章は、施の父である摸末が、太宗から勅書で慰問されたことを誇示する目的で挿入されたに違いない。ところが、その勅書では、太宗李世民が郁射設・摸末と会ったエピソードとして、帰順後に可憐公主を降嫁した際の婚禮のことが引き合いに出されている。もしも帰順以前から太宗と個人的なつながりがあり、なんらかの功績があるのであれば、帰順後の、しかも公的な婚禮の場で会った、などというエピソードをあえて持ち出したりはしないだろう。おそらく太宗はその婚禮の時に初めて摸末と会ったのである。このことは、摸末が、即位前どころか帰順以前に、李世民とならん関係を持っていなかったことを示唆している。彼が唐で不遇だったのは、早い段階で李世民と関係を取り結ぶことができなかったことに由来しているものと考えられる。²⁴

以上のように、突厥滅亡直後における暫定的な羈縻州府設置の際には、即位前から李世民と直接関係を結んでいた、言わば「譜代」の突厥有力者が優遇されて羈縻州府の長をおそらくは独占し、対して、即位後にしか李世民と関係を結ば（べ）なかった「外様」の有力者は、羈縻州府の支配権限を与えられていなかったと考え

られる。²⁶⁾この結論に大過ないとすれば、選出理由が不明である⑤康蘇密も、やはり武徳年間から李世民と何らかの関係を持っていたと推測されよう。李世民による突厥有力者の切り崩しは、彼が玄武門の変によるクーデタで帝位につくよりもはるかに早くから、多くの有力者に対して行われていたのである。

一方で、突厥の有力者側も突厥国内に所属しつつ、李世民と接触を持つという二重関係が発生していたのであり、突厥第一可汗国滅亡以前のそうした関係が、滅亡以後の地位を大きく左右することとなった。それゆえ、第一可汗国時代には王家同士の争いからソグド人との混血という中傷を受け、シヤドの位ではなく特勤の位しか持っていなかった思摩のような人物でさえ、唐支配下では大きく地位を上げることとなったのである。

第二節 太宗期の羈縻支配

ここまで述べてきた点をふまえて、筆者による分類のうち第一段階から第三段階にあたる太宗期の羈縻支配を今一度概括してみたい。

前節で述べたように、第一段階の長たちは、即位前の太宗李世民との直接的な関係によって任命されていた。しかし、この体制の変更を余儀なくされたのが、六三九（貞観十三年）の九成宮事件である。この時、①順州都督・什鉢苾の弟である結社率の呼びかけに応じ、彼と、什鉢苾の息子であり、順州都督を継承したは

ずの賀邏鶻とが太宗の暗殺を企てたことにより、突厥羈縻支配は展開を変え、阿史那思摩が可汗に任命されて突厥は陰山周辺の故地へと移動することとなった〔岩佐一九三六、八四頁〕。

この事件に賀邏鶻が参加したのは、前年の六三八（貞観十二年）に順州が廃止されたからと推測したのは上述の通りである。さらに、④史善應の北撫州も同年に廃止されている。一方、③—二忠はその前年に長州都督を継承しており、⑥史大奈の豊州は、同年に大奈の死去に伴って廃止され、息子の史仁表には継承されていない。

以上の点から、六三七・六三八年ごろに突厥羈縻州府の整理が改めて行われたと考えられる。突厥羈縻州府の長は、原則として所属する遊牧民を統率する権限を持っていたはずなので、羈縻州府の廃止は既得権益の喪失を意味したことだろう。六三三（貞観七）・六三四（貞観八）年の第二段階では基本的に既得権益を維持した「譜代」の有力者たちの中でも、さらに選別が行われたのである。²⁷⁾そして、権限を失った賀邏鶻と善應は長安へ呼び出されたものと考えられる。賀邏鶻はこの待遇に不満を持ったため、暗殺未遂事件に荷担した。²⁸⁾すなわち、彼ら唐の支配下に組み込まれた突厥有力者層にとつて、羈縻州府の長であることは極めて重要なことであり、その権限を奪われることは反乱につながるほどの一大事だったといえる。

さて、「九成宮事件」によって思摩の可汗政権が発足したわけだ

が、この政権にはまだ「譜代」政策の影響が色濃く見られる。そもそも、可汗になった思摩自身が「譜代」の有力者であった。さらに、思摩を輔佐する形で左賢王になった忠も同じく「譜代」であった。しかしながら、上述したように、思摩は第一可汗国時代にはシャドになれなかったため、信頼のおける麾下の兵が存在しなかった。それゆえ、彼が可汗となり独立政権を運営するのは荷が重かっただろう。一方、真の実力者とも言える都布可汗阿史那社爾は、「外様」だったために思摩の可汗政権には参加できなかった。

結局、思摩は突厥民衆の牧地争いを調停できず、民の離反を招いて退位することとなった。第一可汗国における地位が低く、配下に強力な遊牧軍団がいたとは思えない思摩に、国内の支持が集まらなかったのは当然であろう。唐側の論理で決定された可汗人事は、突厥では通用しなかったのである。そもそも、太宗即位前の早い段階で唐に帰順した突厥人は、突厥国内で不遇だったゆえに唐に流れたことは想像に難くない。突厥国内での「負け組」を統治のリーダーに据えなければならなかった点に、太宗期の「譜代」政策の限界があったと言えよう。²⁹⁾

そこで、唐は六四九（貞観二十三年）にこの体制を一新し、「譜代」・「外様」にかかわらず阿史那氏を羈縻支配の権限から遠ざけ、定襄都督には阿史德氏を、雲中都督には舍利氏を置いて支配を委任した〔岩佐一九三六、八六一―八九頁〕と考えられる。これは、

「譜代」であるというだけでは突厥を管理することはできなかったため、突厥内の勢力図なども考慮して、より現実的に即した支配体制に転換したと考えてよからう。その際、危険な存在である王族阿史那氏は権力の外に追いやられることになったのである。こうして、ほぼ太宗一代を通じて展開した「譜代」政策は終わりを告げ、高宗の時代に入って唐の突厥羈縻支配体制は完成したと考えられる。これまで、突厥の羈縻支配体制が皇帝の治世ごとに分けて考えられることはなかったが、太宗期と高宗期でその性格付けが大きく変わっていたのである。

おわりに

本稿では、唐が最初に行った突厥遺民措置である六州の長の事跡を検討し、なぜ彼らが長に任命されたのか考察した。その結果、史料の不足から足取りが追えない康蘇密を除く全員が、麾下に入って群雄討伐に従軍しているか、突厥国内に留まりながら唐と内通し、盟約などの形で関係を結んでいるか、どちらかの形で太宗即位以前の李世民と接触していたことが明らかになった。彼ら「譜代」の突厥有力者たちは、その後も太宗期の羈縻支配において突厥集団の統括を任せ続け、特に阿史那思摩、阿史那忠、の二名は太宗期のほぼ一代を通じて、遺民集団内で高い地位にあった。これらの事実を、太宗期には羈縻州府を編成する際に、支配を請け負う人間を突厥側に既存の地位で選定したわけではなく、李世

民との直接的関係の有無という唐側の論理で決定していたことを示している。しかし、その体制は太宗の最晩年から高宗期に大きく転換し、単于都護府両都督府体制が整えられたのである。

以上の検討により、太宗期の羈縻支配下の突厥では、支配者側である唐（というより皇帝）の選定によって内部の序列に大きな変化が生じていたことが明らかになった。従来、羈縻州府の長は部族長が無条件で任命されたと考えられがちであったが「章群一九八六、九六頁」、少なくとも太宗期の突厥に関しては、人為的な介入が行われており、部族長による任命体制が整ったのは高宗期以降であった。本稿では高宗期のことはほとんど触れられなかったため、これは今後の課題としたい。

突厥が太宗期にこのような措置を受けたのは、やはりその軍事的な脅威に加え、漠南という地理的な特徴が大きな要因であっただろう。石見清裕氏は、唐王朝の成立とは南モンゴルと華北で形成される地域の統一であり、早い段階で突厥を支配下に置いたことが、唐の対外的優位を生んだと指摘している「石見二〇〇八A、六八—六九頁／石見二〇一〇、一三—一四頁」。とすれば、その「統一」を実現するためには突厥側に既存の支配体制を容認してことが済むはずもなく、唐は太宗との関係に基いて、支配体制を作り変えようとしたものと考えられる。突厥の支配の重要度が高かったことの証左であろう。

最後に、今後の課題を述べておきたい。今回は突厥における羈

縻州府のみを取り上げたが、遊牧民に限っても彼らだけがすべてではなくもちろんなく、鉄勒、吐谷渾などの様々な出自の集団が唐で羈縻支配を受けていた。彼らに対する羈縻支配の展開を考察することで、唐支配下における遊牧民の存在形態をより明確にすることが出来る。

また、太宗との関係をより深く検討していく必要もある。というのも、近年、唐皇帝一族を鮮卑系北方遊牧民族の系譜に位置付け、「中国皇帝」としての側面のみならず、「タヴガチ可汗」^②として捉え、特に「天可汗」を名乗った太宗を中央ユーラシア史の視点から見直すことが提唱されている「森安二〇〇七、一六四—一六九頁」からである。従来の認識よりも早い、即位前の時点から、李世民が突厥有力者たちと積極的に関係を持ったことを、今後中央ユーラシア史の文脈の中に位置付けていく必要があるだろう。

加えて、即位前の李世民と突厥の関係に関連して、秦王府で李世民の幕僚として活躍した旧北齊系の有力者層との比較が考えられよう。彼らは山東の群雄たちを経由して李世民のもとに結集し、やがては玄武門の変による太宗即位を支えるスタッフになっていたとされている「山下二〇〇三／堀井二〇〇五」。彼ら、太宗即位前より仕える官僚たちへの待遇と、突厥有力者への待遇に共通点はあるのか。そもそも、両者を分けて考える必要があるのかどうか。これらの疑問に答えることは太宗政権の性格を考える上で重要な作業となるだろう。

以上、中央ユーラシア側の視点と、中国側の視点の両者から新たな疑問点が発生した。これらの疑問に対する答えを求めることで、唐支配下の東部ユーラシアがどのような世界だったのか、より明確になっていくだろう。

注

- (1) 突厥鞏州府の沿革を扱い、岩佐・石見の議論を踏まえていないものは以下の通り。章群一九八六／蘇北海一九八七／林幹一九八八／樊文礼一九九〇／薛宗正一九九二／樊文礼一九九四／吳玉貴一九九八、第七章（和訳 吳二〇〇〇）／劉統一九九八／李鴻賓二〇〇〇／艾衝二〇〇三／王世麗二〇〇六。それ以外の唐の鞏州支配を総合的に研究したものは、本稿では割愛した。詳しくは、石見「一九九八、一七四頁、注一、二」、王義康「二〇一三、八八―一〇六頁」で紹介されている先行研究を参照のこと。
- (2) 「鉄勒」とは「突厥」と同じトルコ系遊牧民を指す史料用語であるが、片山章雄氏「一九八一、三九―四〇頁」が指摘しているように、「突厥」と違って「鉄勒」は古代トルコ語史料中に対応する語がない漢籍史料独自の用語であり、突厥の支配下諸部族全体を指す中国側からの他称である点に注意が必要である。そして、小野川秀美氏がつとに指摘しているように「小野川一九四〇、三六頁／小野川一九四三、三四三頁」、突厥第二可汗国期以降「鉄勒」の語は史料中から消滅する。実際に、石見清裕氏が検討した七四四（天宝三）年作成の「契苾李中郎墓誌」においては、鉄勒諸部の中の九部族政治連合（トクズ・オグズ・Toquz Oynuz）を指して、「九姓鉄勒」ではなく「九姓突厥」と呼ぶ表現が見られる「石見一九九八、二二六―二二九頁」。このように、「鉄勒」の語が史料中で使用されなくなった後、「鉄勒」の概念として、つまりはトルコ系諸部族の総称として「突厥」の語が中国側で利用され

た可能性は考慮すべきであろう。

- (3) 定義は現在の内モンゴル自治区フフホト市ホリンゲル県の土城子遺跡に比定される「齊藤二〇〇九、二九―三〇頁」。当地は、頡利可汗の牙帳の所在地であり、鞏州支配時代には定義都督府が設置されたが、突厥第二可汗国が建国されると突厥の勢力圏に入り、突厥の勢力が衰えた七二〇（開元八）年に唐が単于都護府を復置した「石見一九九二、四一―四一六頁」。
- (4) 突利初自武德時、深自結託、太宗亦以恩義撫之、結爲兄弟、盟與而去。後頡利政亂、驟徵兵於突利、突利拒之不與。尋爲頡利所攻、遣使來乞師、太宗因令將軍周範屯太原以圖進取。
- (5) 唐代の墓誌については網羅的な目録「氣賀澤編二〇〇九」があり、現在知られている墓誌のほとんどの拓本写真・録文の情報はそちらを見れば知ることができると、本稿で用いた墓誌は、採録されているものに関しては目録の資料番号のみ提示する。もちろん、筆者は録文作成時にそれらの拓本写真・録文を比較検討しており、「阿史那忠墓誌」、「阿史那忠碑」、「阿史那思摩墓誌」に関しては、大阪大学文学研究科東洋史学研究室所蔵の拓本も参照している。
- (6) 世民又遣説突利以利害、突利悅聽命。頡利欲戰、突利不可、乃遣突利與其夾畢特勒阿史那思摩來見世民、請和親、世民許之。
- (7) 又以左屯衛將軍阿史那忠爲左賢王、左武衛將軍阿史那泥熟爲右賢王、以貳之。
- (8) 思摩の退位年について、『通典』や『旧唐書』の「突厥伝」は十七年としており、岩佐「一九三六、八六頁」・石見「一九九八、一二二頁」両氏はそれに従っているが、思摩墓誌の記述に従い、十八年に改める「cf. 吳玉貴二〇〇九、一八三頁」。
- (9) 武德之日、元王結款（改行）太宗、公時則綺繡、早蒙謁見。及貞觀云始、塞北乖離、公誘執頡利可汗而以歸國、蒙加寵命、授左屯衛將軍。
- (10) 阿史那忠が頡利可汗を捕らえたことは、『旧唐書』卷一〇九「阿史那蘇尼失伝」（三三九〇頁）からも確認できる。

(11) 突厥にも遊牧民伝統の統治形態である左右翼体制は確認されており、左翼はテリス(Teis)、右翼はタルドウシユ(Tardus)と突厥碑文中で呼ばれている〔護一九六七、三三―三九頁〕。

(12) 『隋書』卷八四「突厥伝」(一八七二頁)に「其の年(開皇十一年(五九一)年)、其(都藍可汗)の母弟の褥但特勤を遣わして于闐の玉杖を獻ぜしむれば、上は褥但を拜して柱國・康國公と爲す(其年、遣其母弟褥但特勤獻于闐玉杖、上拜褥但爲柱國・康國公)とある。この記事を開皇十一年と判断するのは、岑仲勉の説による〔岑一九五八、六五―六六頁〕。

(13) 三年、除左翊衛驃騎將軍。後從(改行)皇上討平東夏、恒冠軍鋒、榮勲第一、加上柱國、封弓高侯。……(中略)……貞觀四年、除都督北撫州諸軍事・北撫州刺史。十二年、追爲左衛將軍。

(14) 竇建德集團の性格と歴史的意義に関しては、氣賀澤一九七二を参照のこと。

(15) 有宗城人獻玄珪一枚。景城丞孔德紹曰、「昔夏禹膺籙、天錫玄珪。今瑞與禹同、宜稱夏國」。建德從之。

(16) 朱振宏「二〇一三、一九四頁」は、史善應の子、史崇禮の墓誌中に、善應の生前の肩書きとして「左衛將軍」と「北撫州都督」が併記されていることを根拠に、史善應が死ぬまで北撫州は存続していたと考えられている。しかし、同箇所の肩書きには武徳五(六二二)年に「左衛」に改称される「左翊衛」〔『唐会要』卷七一「十二衛」(一五一―一八頁)の役職である「左翊衛中郎將」が、「左衛將軍」と併記されているため、彼が生前に帯びた役職をすべて列挙したと考える方が合理的である。それゆえ、この記事を根拠に北撫州が善應の死去まで存続していたとは言えない。

(17) 四年正月、李靖進屯惡陽嶺、夜襲定襄、頡利驚擾、因徙牙於嶺口。胡酋康蘇密等遂以隋蕭后及楊政道來降。

(18) 貞觀四年、突厥降附、又權于此置豐州都督府、不領縣惟領蕃戶、以史大奈爲都督。十一年、大奈死復廢府、以地屬靈州。

(19) 特勤大奈、隋大業中與曷薩那可汗同歸中國。及從煬帝討遼東、以功授金紫光祿大夫。後分其部落於樓煩。會高祖舉兵、大奈率其衆以從。……(中略)……武徳初、從太宗討薛舉、又從平王充・竇建德・劉黑闥、並有殊功、賜宮女三人、雜綵萬餘段。貞觀三年、累遷右武衛大將軍・檢校豐州都督、封竇國公、實封三百戶。

(20) このほかにも、岩佐精一郎氏が、原州府蕭關県に属す銀州や、塩州、營州付近の瑞州などにも、貞観初期から突厥部落が存在していたことを指摘している〔岩佐一九三六、八三頁〕が、史料の不足によりそれらの詳細は不明である。

(21) 正確な訳文は提示していないものの、吉田豊氏も同じく泥利の死去年を六〇四年に断定している〔吉田二〇一一、二頁〕

(22) 前述した「史善應墓誌」でも、やはり七〇八行目に「大業五(六〇九)年、朝散大夫を授る。頻りに煬帝の遼東を征すに従い、累ねて右光祿大夫・右武衛武牙郎將に遷る(大業五年、授朝散大夫。頻從煬帝征遼東、累遷右光祿大夫・右武衛武牙郎將)とあって、史善應が煬帝に従って高句麗遠征に参加したことが記録されている。隋の軍中における遊牧軍団の利用についてはまだ不明な点が多く、今後の課題である。

(23) 突厥史の文脈からは、西突厥系の阿史那氏である史大奈を東突厥の有力者と同列に扱うことに、問題がないとは言えない。しかし、元來東突厥の木汗可汗の子孫である泥彌処羅可汗とともに投降しているため、彼も木汗可汗の子孫と見出しうる点などを考慮して同列に扱った。西突厥で正統阿史那政権が崩壊し、非正統による十姓(十部)部族連合が誕生する以前に、唐が突厥・西突厥を別の集団とみなしていたかどうかという点も含めて、今後の検討課題であろう。西突厥十姓の問題に関しては内藤一九八八、第二章を参照のこと。

(24) 太宗勅書慰問曰、「突厥都射設・可憐公主是朕親舊、情同一家。隨日初婚之時、在朕家内成禮、朕亦親見。追憶此事、無時暫忘。」

(25) 石見清裕氏は、郁射設阿史那摸末の帰順を突厥第一可汗国崩壊の一

例として重視しているが、「石見一九九八、一〇〇一—一〇一頁」、李世民の突厥への働きかけは武徳年間から早くも始まっており、郁射設はむしろ接触が遅い例として再評価されるべきであろう。

- (26) 本文中では阿史那社爾と阿史那摸末の二者の例を挙げたが、このほかにも典籍史料や墓誌史料から存在が知られている唐に降った突厥有力者として、頡利可汗の息子である阿史那曇羅施、『新唐書』卷九三「李靖伝」、(三八一—四頁) / 『新唐書』「突厥伝上」、(六〇三—六頁) や、阿史那婆羅門『氣賀澤編二〇〇九、一〇〇四〇』、頡利可汗の孫の阿史那伽那『西安市長安博物館二〇一一、九八—九九頁』などがある。彼らはいずれも投降以前の唐との接触が確認できず、鞏州の長にも任じられていない。

- (27) なぜ唐がこの両年に鞏州府の整理を行ったのか、現時点では不明である。今後の課題としたい。

- (28) 岩佐精一郎氏は、貞観十二年の順州廃止を伝える『旧唐書』の記述について、十三年の誤りであり、反乱の結果廃止されたと推測している。「岩佐一九三六、八四頁」が、仮に賀邏鶻が順州刺史の地位を認められていたとすれば、あえて反乱を起こす必要もなかったであろう。また、呉玉貴氏は、賀邏鶻は名目上は順州都督を継承したものの部落に帰ることを許されず、太宗の侍衛に留められたために不満をいだいたとする。「呉玉貴一九九八、二五八頁」が、部落に帰れなかった理由を説明しておらず、順州が廃止されたと考えた方が自然である。

- (29) 思摩のほか、隋のころに突厥国内から脱落した史善應や史大奈、頡利可汗と不仲になり捕縛されたこともある阿史那什鉢悉、『通典』卷一九七「边防十三 突厥上」(五四—二頁) など、ほかの第一段階の鞏州府の長も突厥国内から脱落した人物で構成されている。

- (30) タヴガチ可汗「Avtac Qayan」とは、古代トルコ語の突厥碑文中で隋唐を含む北朝鮮卑系諸皇帝を呼ぶ名称であり、「拓跋」から転訛した表現であるとされている。タヴガチと拓跋の関係については、羅新二〇〇九、五一—五七頁を参照のこと。唐は拓跋氏出身ではないので、唐

をタヴガチと呼ぶのは厳密な事実を表したのではないが、北方の突厥人からすれば北魏拓跋氏から連なる北朝系の諸帝室は、十把一絡げに拓跋氏と同類の存在に見えていたのであり、それゆえにどれも同じくタヴガチと呼ばれていたものと考えられる。

参考文献

- 『隋書』／『旧唐書』／『新唐書』／『通典』／『資治通鑑』／『元和郡县图志』
 Ⅱ 中華書局標点本。
 『唐会要』／『大唐創業起居注』 Ⅱ 上海古籍出版社標点本。
 岩佐 精一郎 一九三六「突厥の復興に就いて」和田清(編)『岩佐精一郎遺稿』東京、岩佐傳一発行、七七一—六七頁。
 石見 清裕 一九九二「単于都護府と土城子遺跡」唐代史研究会(編)『中国の都市と農村』東京、汲古書院、三九一—四二四頁。
 一九九八「唐の北方問題と国際秩序」(汲古叢書二四) 東京、汲古書院。
 二〇〇七「唐代墓誌史料の概観——前半期の官撰墓誌・規格・行状との関係——」『唐代史研究』一〇、三一—二六頁。
 二〇〇八A「唐とテュルク人・ソグド人——民族の移動・移住より見た東アジア史——」『東アジア世界史研究センター年報』一、六七—八一頁。
 二〇〇八B「唐代墓誌の資料的可能性」『史滴』三〇、一〇九—一二二頁。
 二〇一〇「唐の成立と内陸アジア」『歴史評論』七二〇、四—一六頁。
 大澤 孝 一九九九「新疆イリ河流域のソグド語銘文石人について——突厥初世の王統に関する一資料——」『国立民族学博物館研究報告別冊』二〇、三二七—三七八頁。
 小野川 秀美 一九四〇「鉄勒の一考察」『東洋史研究』五一、一—三九頁。

——一九四三「中世(突厥回鶻時代)」「支那周辺史(上)」(支那地理歴史大系(六))東京、白揚社、三三五—四二七頁。

片山 章雄 一九八一「Toguz Ouz」と「九姓」の諸問題について」『史学雑誌』九〇—二、三九—五五頁。

氣賀澤 保規 一九七二「竇建德集団と河北——隋唐帝国の性格をめぐって——」『東洋史研究』三二—四、四五—四八〇頁。

氣賀澤 保規(編) 二〇〇九「新版 唐代墓誌所在総合目録(増訂版)」(明治大学東洋史資料叢刊五)東京、明治大学東アジア石刻文物研究所。

吳 玉貴 二〇〇〇「唐朝における東突厥降衆の安置問題に関する一考察」村川行弘(監修)『七・八世紀の東アジア——東アジアにおける文化交流の再検討——』八尾、大阪経済法科大学出版部、四九—一〇〇頁。

齊藤 茂雄 二〇〇九「唐代単于都護府考——その所在地と成立背景について——」『東方学』一一八、一二—三九頁。

——二〇一「突厥「阿史那感德墓誌」訳注考——唐羈縻支配下における突厥集団の性格——」『内陸アジア言語の研究』二六、一—三八頁。

——二〇一四「突厥とソグド人——漢文石刻史料を用いて——」森部 豊(編)『ソグド人と東ユーラシアの文化交流』東京、勉誠出版、二二七—二三三頁。

鈴木 宏節 二〇〇五「突厥阿史那思摩系譜考——突厥第一可汗国の可汗系譜と唐代オールドスの突厥集団——」『東洋学報』八七—一、三七—六八頁。

谷口 哲也 一九七八「唐代前半期の蕃将」『史朋』九、一—二四頁。

内藤みどり 一九八八「西突厥史の研究」東京、早稲田大学出版部。

布目 潮風 一九六八「唐朝初期の唐室婚姻集団」『隋唐史研究——唐朝政権の形成——』(東洋史研究叢刊之二十一)京都、東洋史研究会、三一四—三六七頁。

福島 恵 二〇〇五「唐代ソグド姓墓誌の基礎的考察」『学習院史学』四三、一三五—一六二頁。

堀井 裕之 二〇〇五「即位前の唐太宗・秦王李世民政団の北齊系人士の分析」『駭台史学』一二五、一一—四五頁。

護 雅夫 一九六七「古代トルコ民族史研究Ⅰ」東京、山川出版社。

森部 豊 二〇一〇「ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的發展」(関西大学東西学術研究所研究叢刊三二〇)吹田、関西大学東西学術研究所。

森安 孝夫 二〇〇七「シルクロードと唐帝国」(興亡の世界史 第〇五卷)東京、講談社。

山下 将司 二〇〇三「玄武門の変と李世民配下の山東集団——房玄齡と齊濟地方——」『東洋学報』八五—二、一九—四九頁。

——二〇一「唐のテュルク人蕃兵」『歴史学研究』八八一、一—一頁。

吉田 豊 二〇一「ソグド人と古代のチュルク族との関係に関する三つの覚え書き」『京都大学文学部研究紀要』五〇、一—四一頁。

艾 衝 二〇〇三「唐前期東突厥羈縻都督府の置廢与因革」『中国歴史地理論叢』一八—二、一三五—一四一頁。

岑 仲勉 一九五八「突厥集史」北京、中華書局。

陳 凌 二〇一三「突厥汗国与欧州文化交流的考古学研究」上海、上海古籍出版社。

陳 志謙 二〇〇二「阿史那忠碑誌考述」『文博』二〇〇二—二、七〇—七四頁。

樊 文礼 一九九〇「唐代靈・慶・銀・夏等州界内的僑置府州」『民族研究』一九九〇—四、八四—九六頁。

——一九九四「唐貞觀四年設置突厥羈縻府州考述」『中国边疆史地研究』一九九四—三、八八—九四頁。

葛 承雍 二〇〇六「東突厥阿史那摸末墓誌考述」『唐韻胡音与外来文明』北京、中華書局、一四〇—一四七頁。

李 鴻賓 二〇〇〇「朔方軍的設置」『唐朝朔方軍研究——兼論唐廷与西北諸族的關係及其演變——』長春、吉林人民出版社、九—六七頁。

林 幹 一九八八「突厥史」(中国古代北方民族史叢書)呼和浩特、内蒙古人民出版社。

劉 統 一九九八「唐代羈縻府州研究」西安、西北大学出版社。

羅新 二〇〇九「論拓跋鮮卑之得名」『中古北族名号研究』北京、北京大学出版社、四九一—七九頁。

馬馳 二〇一「唐代蕃將」西安、三秦出版社。

陝西省文物管理委员会／礼泉县昭陵文管所 一九七七「唐阿史那忠墓發掘簡報」『考古』一九七七—二、一三三—一三八、八〇頁。

蘇北海 一九八七「唐朝在回紇・東突厥地区設立的府州考」『新疆大學學報』一九八七—一、四六一—五五頁。

湯燕 二〇一三「新出唐史善應・史崇禮父子墓誌及突厥早期世系」『唐研究』一九、五六九—五八七頁。

王慶衛 二〇一四「新見唐代突厥王族史善應墓誌」『中国国家博物館館刊』二〇一四—四、四九一—五八頁。

王世麗 二〇〇六「東突厥汗國的敗亡和鞏慶府州的建立」『安北与单于都護府——唐代北部边疆民族問題研究』昆明、雲南人民集团公司／雲南人民出版社、一一五六頁。

王義康 二〇一三「唐代边疆民族与对外交流」哈爾濱、黑龍江教育出版社。

吳玉貴 一九九八「突厥汗国与隋唐關係史研究」北京、中国社会科学出版社。

—— 二〇〇九「突厥第二汗国漢文史料編年輯考」北京、中華書局。
西安市長安博物館（編）二〇一一「長安新出墓誌」北京、文物出版社。

蕭錦華 一九九八「唐初收復東都洛陽考」『史數』三、四三—一〇七頁。

薛宗正 一九九二「大漠南北的唐朝鞏慶州府」『突厥史』北京、中国社会科学出版社、三七—四三〇頁。

章群 一九八六「唐代蕃將研究」台北、聯經出版。

朱振宏 二〇一三「新見兩方突厥族史氏家族墓誌研究」『西域文史』八、一七九—二二三頁。

Clauson, G. 1972. *An Etymological Dictionary of the Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford.

Pulleblank E. 1952. *A Sogdian Colony in Inner Mongolia*. *Young Pao* 41, pp. 317–356.

〔付記〕本稿は公益財団法人サントリー文化財団二〇一三年度「若手研究者のためのチャレンジ研究助成」による研究成果の一部である。

The Türk Leaders and Li Shimin: The Loose-rein Control of Türks during the Taizong Period of Tang

SAITO Shigeo

This paper investigates the process by which regional commanders were selected during the early period of Tang Chinese “loose-rein” rule over Turkic tribes following the defeat of the First Türk Qaghanate 突厥第一可汗国 in 630. On the basis of this investigation, it demonstrates that the even before Li Shimin ascended the throne as Emperor Taizong 太宗, the second Tang emperor, these commanders had been selected from among the men who had rallied to his support in his campaigns to pacify northern China (Shi Shanying 史善應, Shi Danai 史大奈), or from Türks who had become his allies or formed other personal relationships with him (Ashina Shibobi 阿史那什鉢苾, Ashina Zhong 阿史那忠, Ashina Shimo 阿史那思摩, and Ashina Sunishi 阿史那蘇尼失). Only one among them, Kang Sumi 康蘇密, remains a mystery due to inadequate historical source materials.

This research has confirmed that the loose-rein policy of control of the Türks throughout Taizong’s reign was conducted principally by these commanders selected at the beginning. But, since a number of these individuals had been of low rank or status during the First Türk Qaghanate, they were unable to gain the support of the Turkic people, and this system of rule collapsed for a time. However, from the reign of Gaozong 高宗 onward, a more realistic system of control was initiated, and the loose-reign policy attained its most perfected state.

